

“雲の上のまち”で、川を魚を守る人たち！ = 梶原町 魚族保護会 =

清流通信読者の皆様こんにちは。今回は四万十川源流域梶原町からお伝えします。



今年、NHK 大河ドラマ『龍馬伝』で賑わう四万十川の源流域“雲の上のまち”梶原町。南国土佐にありながらも、標高 1455m にもなる四国山脈に抱かれたその名のとおりの山里には、冬ともなれば積雪を見ることもまれではない。町面積の 91% を森林が占め、その急峻な山の斜面には、坂本龍馬が脱藩をしたとき通ったという“脱藩の道”が走る。町の中心に、四万十川の第一支流梶原川が緑深い町を二分するように南下し、その流れは四万川や隣接する津野町からの北川の支流を集め、やがて四万十町大正で四万十川本流に合流する。

そしてここには、夏から秋にかけて、鮎やアマゴを釣るため多くの釣り客が訪れる。

梶原町 魚族保護会

皆様は、“遊漁券”というものをご存じだろうか。“遊漁券”とは川で魚を釣るための許可証で、地元の漁業協同組合などが発券・管理している。

ここ四万十川には、本流に5つの漁業組合があり、四万十市河口域から四万十町、上流域中土佐町大野見までを管理している。そして、支流の梶原川と北川が流れる梶原町・津野町の管轄・管理をするのが、梶原町と津野町役場に事務局を置く“魚族保護会”だ。

そもそも“遊漁券”を発券する組織は、釣りを楽しんでもらうため鮎やアマゴなどの渓流魚を放流しているのだから、釣りをするならそこが発行する遊漁券を購入するのは当然の事といえる。しかし、遊漁券を購入しないで釣りをしたり、禁止区域で釣りをしたりという人々も、残念ながら後を絶たない。だから、川や魚を守るために、“魚族保護会”は多忙な日々を送る。

“土佐の匠”のこだわり

この“魚族保護会”の梶原町会長を務めるのが、ここ“雲の上のまち”で生まれ育った影浦賢さんだ。彼の本業は、鍛造業。「鍛冶屋が作ったものは使い捨てではなく、再生して新しい命を吹き込むことが出来る。そうして鉄を大事にし、活かしていきたい。」こうした強いこだわりを持って仕事をする影浦さんは、その高い技術が認められ、平成14年には高知県から『土佐の匠』(*)として認定されている。

もう一つ、彼の仕事上のこだわりは、環境に配慮した鍛造業。炉を焚くのに重油を使うと二酸化炭素が多く出るので、環境に配慮した鍛造を考えないといけない。今は“松炭”を使っているが、年間3トンの木炭を使用するという。「化石燃料のCO2は木の成長には良くないと言われていました。だから、梶原町の91%を占める森林のため、ひいてはこの川を育む森のため、大変だけれども炭を使って仕事をする事は譲れないのです。」

* “土佐の匠”とは、平成8年スタートした制度で、古くから受け継がれてきた伝統技能や、地域産業の基盤ともなってきた熟練技能などの、優れた継承者を認定する制度。

“魚が棲む川”を守るために！

「子どもの頃にはもっと魚がおったのです。」と今を嘆く影浦さんは、釣りが好きで、魚が好きで、午後は学校にも行かずに釣りをするような少年時代を送ったと話す。

「けれど、ある時を境に、川から田んぼから、ドジョウ・タニシ・ウナギが消えた。日本の高度成長期に日本の“川”は変わってしまったと思います。除草剤を使うようになって、昔は田んぼの中にいっぱい見かけたゲンゴロウの姿を見る事がなくなった。」

そう言えば、確かに子どもの頃にはよく見かけた“ゲンゴロウ”がどこへ行ってしまったのか、すっかり姿を消している。

「シラスウナギは真水に触れると黒くなるのを知っていますか？子どもの頃、遡上の時期になると、川の両岸はウナギの背で真っ黒に染まった。そして、1時間もすれば10匹以上は捕れたものです。」そこには生き活きとした川本来の姿があったのだ。

「昔の四万十川には生物の多様性があり、それ故、四万十川に生活ごと関わる人々が多かった。そこには、人間の“おごり”などなかったし、川は大切にされていたのです。」「人間はもっと謙虚になるべきなのです！」穏やかに話す影浦さんの口調が、そう言った時だけは強く響いて、私の心に突き刺さった。

それは“魚が棲む川”を守ろうという、彼自身の決意のように、私には思われた。